九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『風に紅葉』物語覚書(二)

辛島, 正雄
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/10513

出版情報：文獻探究. 9, pp.19-24, 1981-12-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

『風に紅葉』物語覚書（二）

辛島正雄

3

本物語には、開巻劈頭、次のような序文がおかれており、しかる後に、主人公の両親の紹介が、型どおり始まるようになっている。

かぜにもみぢのちる時は、さらでもものがなしきならひといひをけるを、まいてをいのなみだの袖のしぐれははれまなく、こけのしたのいでたちよりほかは、なにのいとなみあるまじき身に、せめてのりんえのごうにや、むかしみさゝし事、人のかたりし事、そゞろに思ひつゞけられて、とはずがたりせまほしき心のみぞいでくる。その中に、なべて物がたりなどにいひつゞけたる人にはかはりて、えんにいみじうもあらず、なみのさはぎにかぜしづかならぬよのことはりを思ひしるかとすれど、それもたち返りぢに、よろづにつけて心えぬ人のうへをぞ、あむじいだしたる。あまりきゝ所なきは、むかしにはあらぬなんめり。（一四三）

この序文については、従来、「作者が顔を出していることは、珍らしく、『秋の夜の長物語』ともやや近接したものが感じられる」（市古貞次氏[1]）とか、「夜半の寝覚をまねたのであろうが、他にはちょっと見当らない」（小木喬氏[2]）といわれている。いきなり『夜の寝覚』や『秋の夜の長物語』との相似をもち出すのはいかがと思われるところもあるが、序文というかたちで語り手（「作者」というと、やや誤解を招く虞れがあろう）の態度がかなりはっきりと示されていることは、たしかに注目させられる。

物語の冒頭文の変遷については、すでに先学のすぐれた考察が重ねられ、いくつかの類型に分類する試みもあるが[3]、市古・小木両氏も述べられたように、本物語の形式はめずらしいといえる。引歌・引詩による起筆は、『狭衣物語』などの斬新な冒頭描写が評判をとって以来、むしろ主流となりえているが、本物語も同じく和歌を踏まえた起筆であるとはいえ、それらが物語の一場面にいきなり読者を引き込む臨場感をねらってのものであるのとは、まったく異なる。また、回想による主題提示型ということなら、小木氏のいわれる『夜の寝覚』や『苔の衣』などが別の一群をなすが、それとも様子が違うようである。むしろ、そうした物語の伝統の中で栄えた冒頭文より、日記の序文との近似を感じさせるのではあるまいか。例えば、『讃岐典侍日記』や『中務内侍日記』のそれである。

・五月の空もくもらはしく、田子のもすそもほしわびらんもことわりと見え、さらぬだにものむつかしきころほひ、心のどかなる里居に、常よりも昔今のこと思ひつづけられて、よのあはれ

なれば、はしを見いだしてみれば、雲のたたずまひ・空のけしき、思ひしり顔にむら雲がちなるを見るにも、「雲居の空」といひけん人もことわりと見えて、かきくらさるるここちぞする。軒のあやめのしづくもことならず。山ほととぎすも、もろともにねをうち語らひて、はかなく明くる夏の夜な夜な過ぎもていそのかみふりにし昔のことを思ひいでられて、涙とどまらず。（中略）なぐさむや、と思ひいづることども書きつづくれば、筆のたちども見えずきりふたがりて、すずりの水に涙落ちそひて、水くきのあとも流れあふここちして、涙ぞいとどまさるやうに、書きなどせんにまぎれなどやするとて書きたることなれど、姨捨山になぐさめかねられて、たへがたくぞ。(5)

・いたづらにあかしくらす春秋は、ただ羊のあゆみなるここちして、すゑのつゆ、もとのしづくに、おくれさきだつためしのはかなき世を、かつ思ひながらも、得脱の縁には進まず、みな生々世々にまよひぬべき人間の八苦なるぞあさましき。(6)

一読、その筆致の通い合うことが感じられると思う。もちろん、日記そのものに多分に物語化の傾斜があるので、物語の起筆、日記の起筆と峻別しようとすること自体にはじめからやや無理があるのかもしれないが、ともかく、完全な作り物語である本物語の序文が、一部の日記のそれとよく似た叙述をとっているということは、注意しておいてよいであろう。と同時に、このこととも関連しようが、本物語が明らかに、いわば〈現代小説〉として意図されたものであることも、注意を要しよう。一般的にも、昔物語風の時代仮構から解放されてくるのが、『源氏物語』以降の流れだが、時代の下った物語では、自作の時代設定など、単に旧套になずんだだけの形骸にすぎず、創作意識の中からほとんど欠落してしまっているようにも見うけられ、これほど明確な近時仮構の表明をしているのは、めずらしいのではなかろうか。日記的起筆は、そのための方便、といえばことばが過ぎるだろうが、有効にはたらいているとは考えられる。

ところで、いま、本物語の序文が特異な類例を見ないものだというようなことを述べたばかりだが、管見に入ったもののうちに、一作だけ、よく似た序文をもつ物語がある。次に掲げる『風につれなき物語』(7)である。

ことの葉しげきくれたけのよゝのふるごとゝなりぬれば、なにのをかしきふしとて、すぐれたるきゝ所なけれど、おのづから心にとまりたるすぢ〳〵を思いでつゝ、秋のあけがた、きおいのねざめのつれ〴〵なるまゝに、こゝうをやりたりしとはずがたりをかきあつめて、とまらむあとのあやしけれど。(8)

この物語についても、すでに市古氏や小木氏の研究(9)があり、さらに近時樋口芳麻呂氏が詳細に総合的な考察を発表(10)されて、鎌倉時代物語の代表作の一つと目されている。右の起筆は、樋口氏の指摘されたごとく、『古今和歌集』巻十八・雑下の読人しらず歌（九五八番）、

世にふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとに鶯ぞなく

に拠るのであるが、さらにつづいて、

呉竹の世々のふるごとおもほゆる昔語りはわれのみやせん

という和泉式部の歌(11)をも踏まえると見たい。いうところは、ある老

人が、さほど興趣をおぼえるような過去の見聞ではないが、忘れがたいことどもを思い出しては、秋の夜長の寝覚めの無聊の慰めにとした「とはずがたり」を、記しとどめておこう、というのである。これは、本物語の、ひたすら後世を願うばかりの老人が、いまだ迷いをはらしえず、昔見聞きしたことを「とはずがたり」したい衝動に駆られ、ふつうの物語とはちがった、万事に不心得な人についてのことを語ろうと思うのだ、といっているのと、まことによく似ているのである。ここに直接の影響関係があると見るべきか否かは、早断を許さないが、『風につれなき』が、現存本こそ首巻のみの零本としてしか残されなかったとはいえ、『風葉和歌集』に、全収載物語中第四位（『源氏』『うつほ』『狭衣』に次ぐ）という四十五首もの入集歌をもつことは、往時の評価の高さを思わせるのであり、他に同種の冒頭文をもつ物語が見当らず、また、「あまりきゝ所なき」と「すぐれたるきゝ所なけれど」という謙辞、「とはずがたり」の語など、表現の上からも近いものがあることから、直接交渉を認めたい誘惑に駆られるが、今のところ、この序文以外にそれらしい交渉の跡を見出しえていないので、ここでは類似を指摘するにとどめておきたい。ただ、中世の物語の創作・享受の実態の解明は、平安朝物語の場合に比べて著しく立ち遅れているので、今後の調査で明らかになってくるところもあるのではないかと期待される。現に、『いはでしのぶ』が『恋路ゆかしき大将』に引かれている事実[12]があり、中世の物語どうしの影響関係も、ないではないのである。

さて、本物語の序文は、そのスタイルもさりながら、内容自体にかかわって、どのような意味あいをもってくるのであろうか。語り手は、ふつうの物語に描かれる人物と違って、魅力的でも風流でもなく、世の無常を悟ったかと思っても徹しきれず、「よろづにつけて心得ぬ人のうへ」を語ろうと、はっきり意志表明しているのであるが、くせものは「あまり聞き所なきは、昔にはあらぬなんめり」である。なぜこうしたことわりがことさら必要なのか。「とはずがたり」の語の性格の一面のあらわれであるとは考えられるが[13]、それで片づけてよいものなのか。

この一文を目にした読者は、当然ながら謙辞と見、それは擬装であって、従来のありきたりの類型を脱した、目新しい、当世に舞台をとった物語が展開するのだろう、と期待するに違いあるまい。すなわち、この謙辞は、「以前の物語を対象化してそれとは異った新たなる作品を成したとの自負の言」[14]と受けとられることになろう。が、ここで筆者には、先の『風につれなき』の序文の「なにのをかしきふしとて、すぐれたる聞き所なけれど」という謙辞について、

これはたんなる謙辞以上のもの、常套的話柄を敢てすることに無意識ながら気がさした作者の言訳ととることは、こじつけに過ぎるであろうか。

と、本音のあらわれではないかと疑っておられる今井源衛先生の言[15]が思い合わされる。その当否はともかく、本物語について言えば、謙辞がそのあるべき機能を果たしたことになるものなのか、きわめて疑問であると思うのである。

序文に応ずる本文中の草子地については、叙述形式の面から市古

氏が注意されたことがあるが、次に顕著な二例を掲げる。

・かくすぐれぬる人は、かならず心づくしをもとゝしてこそ、えむにあはれにおもしろうもあるを、さこそあれ　さやうのみだれも、御心のそこよりなし。なにかはさしもあだなる世に、あながち心づくしなる事もあるべき。　（一四六）

・すべてこの物がたりのくせぞかし。つくりける人の心のきはもをしはかられて、ものしうおぼえ侍やと、かきうつす人のいひける。　（一五一）

前者は、主人公が妻一品の宮ひとりを大切に守って、少しも浮いたところがないことへの語り手のことわりであり、後者は、伯父の太政大臣邸の梅見の宴に招かれた主人公が、その夜、その北の方と契ったことを直接には承けながら、本物語の全般的な傾向について批評した、手のこんだ草子地[16]である。こうした言い方の中には、従来の物語での男女の真摯な恋の懊悩といった主要な関心事に、もはや無邪気に喝采をあげ共感することのできなくなっている作者の位置、そして時代の凋落ぶりとでもいうべきものを感じさせるが、問題は、序文では今の世の物語をするということを言明していながら、実際には、「昔にはあらぬ」自らの生きる時代に相対峙しようとする姿勢を抛棄しているとしかいいようのないことであろう。作者は物語を綴りはするが、それが盛り上がらぬと見るや、逸早くその原因を、取材した現実がつまらないから、という逆転した論理に封じ込める手練手管だけはわきまえている、といった具合で、物語のうわすべりは、覆いようのないものになってしまっている。

序文にいう「とはずがたり」とは、湧き上がる内的衝迫にこらえきれずに語る、ということである。文学ジャンルは異なるにせよ、かの『とはずがたり』とは、まさにそういう作品であった。それがここでは、ことばの性格を知った上でのポーズでしかなかったのか、それとも、〈心あまりて詞たらず〉ということなのか、はたまた、意気ごみはそれとしてあったもののすぐに萎えしぼんでしまったものなのか、いずれにせよ、不完全燃焼のまま終ってしまっている、いかにも龍頭蛇尾だといわざるをえない。

こうしてみると、先の「あまり聞き所なきは」云々は、自らの作家的力倆の限界を知る（その一方、技術的な面では、伝統的手法をかなり自在に使いこなせる）作者が、あらかじめ予防線を張っていたのではないかという忖度までしたくなる。後で読者に、「ちっともどきどきするような事件もないわねえ」と言われれば、「だって、はじめから、この浪季に取材していて、とても昔のうっとりな物語のようにはいかないっておことわりしていたでしょ？」と、非難をかわす途をつくっておいたというわけである。

とはいえ、主人公に関しては、「よろづにつけて心得ぬ人」という頭初の語り手の概評した性格で、首尾一貫しているとはいえるのであり、序文がまったく無責任な誇大宣伝であったということではない。しかし、それも、「すべて大将（＝主人公）は、極めて優柔不断な、はっきりした意志を持たないあいまいな人間として描き上げられている」（市古氏。圏点筆者）というようなものではなく、性格描写の結果というより、単に、個性をもたず、消極的で、善人

づらをした人間像でもって押し通せばこうなるというにすぎない。とすれば、こんな主人公を立てたこと自体がそもそものまちがいのもとというべく、物語ははじめから豊かなみのりなど期待すべくもなかったのであろうが、そうした主人公像が当時の貴族の無気力・頽唐感といったものと重なり合うようになっているため、現実的であるということ（序文の「昔にはあらぬなんめり」も嘘ではないのである）と物語として発展性を欠いたものになるということとが、悪循環的に全篇を覆ってしまったというような次第ではあるまいか。そして、物語らしい筋を支えるのが、結局、出家遁世譚的プロットであるとか、予言の構想であるとか、あるいは『源氏物語』の模倣であるとか、もともと本物語が脱しようとしたはずの、その最たるものによってであったのは、いかんともしがたいことであった。

作者はたしかに、当時の貴族社会の現実を目のあたりにして、無関心ではいられなかったと思われる。前回でも一部引用したところだが、小木氏が、

「蜻蛉日記」の著者が、「世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり」と、当時の「男女などによせつつ蝶よ花よと言へる」（三宝絵）物語類に反撥して、日記を書いたように、この「風に紅葉」の作者も「源氏」以来何百編という有り来たりの「もののあはれ」の擬古物語にあきたらず、もっと世情を有りのままに写した小説をと志したのではあるまいか。久我雅忠女が、「とはずがたり」を書かずにはいられなかった心境と共通したものがあると言える。

と述べられた(17)ことは、作者の心内の問題としては当たるところがあろう。しかし、いかんせん、この作者には、負の価値ばかりの目に立つ現実の病巣をも剔抉してやまない精神的強靭さとでもいうべきものが、欠如していた。過去の書き古された恋物語など、当の現実からすると絵空事に見えるが、さりとて、新たに自らも属する現実を対象化するには、そこでの生活に安住・埋没しすぎているのであり、そうした曖昧な姿勢そのものが、物語の性格を決したとの印象が強い。「よろづにつけて心得ぬ」とは、主人公のみならず、物語自体、さらには作者自身をも評するに恰好のことばであった。

以上、第二回として、本物語の性格を考えるにあたって従来もふれられることの多かった序文を採り上げ、その形式や内容につき、若干の考察を加えた。（続稿）

（一九八一年一二月稿）

〔注〕

（1）「はじめに」に掲げた論文(1)。なお、市古氏近著『中世小説とその周辺』（昭56）にこの論文は収められた。

（2）同右論文(2)。

（3）三谷栄一『物語文学史論』（昭27）第二章・二「新想の完成」の「巻頭描写の展開」の項、ならびに、鈴木一雄「『堤中納言物語』の作風とその成因をめぐって」（『堤中納言物語序説』〈昭55〉所収）参照のこと。なお、鈴木氏は、『和泉式部日記全講』（昭40）の「考説」において、起筆と冒頭のちがい、物

語と日記の冒頭描写の関係について」など述べておられ、啓発されるところが多い。

（4）『新古今和歌集』巻六・冬の藤原高光の歌（五五二番）、

神無月風に紅葉の散る時はそこはかとなくものぞ悲しき

を踏まえた行文であること、市古氏の指摘されたとおりである。

（5）石井文夫　日本古典文学全集『讃岐典侍日記』（昭46）三七一ページ。

（6）玉井幸助『中務内侍日記新注増訂版』（昭41）一ページ。

（7）この二作の物語の序文については、松本章至氏が「『とはずがたり』題名考一（『とはずがたりの研究』〈昭46〉所収）において、「とはずがたり」の語義を明らかにするための用例として提げられたことがあり、その時、「これ（『風に紅葉』）も虚構物語で日記ではないが、（序文ハ）作者の見聞を記すという形式で『風につれなき物語』と同様である」と述べられた。また、『風につれなき』の序文については、大槻修氏の「鏡物に見られる不自然な高齢者とか法話臭を脱して、素直に〈語り〉に移行させた」もので、「改作本『夜の寝覚』型に準じていよう」との見解がある（「平安後期・鎌倉時代物語の多様性――起筆法・冒頭文の展開について(二)――」〈「甲南国文」24号　昭52・3〉）。

（8）『続々群書類従歌文部(二)』所収本の六〇五ページであるが、一行目「よゝに」を丹鶴叢書板本に拠り「よゝの」と改めた。

（9）市古「中世物語の展開」（岩波講座『日本文学史6巻　中世』〈昭34〉所収・のち『中世小説とその周辺』再録）、小木『鎌倉時代物語の研究』第二篇・八「『風につれなき物語』」。

（10）「『風につれなき物語』考――『源氏物語』との関連にも触れて――」（『源氏物語とその影響　研究と資料』〈昭53〉所収）。

（11）『和泉式部日記』三条西本・寛元本。『和泉式部集』（正集）では第五句「きみのみそせん」、定家本では第三句「こそはえむ」、第五句『集』に同じ。

（12）小木『鎌倉時代物語の研究』第二篇・四「恋路ゆかしき大行物語」参照。

（13）「とはずがたり」の語義や特質については、（7）の松本論文、および、阿部秋生『源氏物語研究序説』（昭34）第二篇・第一章・第三節・三「貴種流離譚」参照。

（14）安藤亨子「風に紅葉・春日山」（「解釈と鑑賞」昭55・11）。

（15）「王朝物語の終焉」（「国語と国文学」昭29・10）。

（16）これについて市古氏は、「作者が傍観者の立場をとっているのである。『松浦宮物語』において、作者は、物語を進行、完結を糊塗するために、書写者らしい見せかけたのであった。ただ、本書のそれは松浦宮の方法を承けたものとみるべきであろう」と述べられた。

（17）『散逸物語の研究　手引・鎌倉時代編』第一章・第一節「物語史概説」。

――九州大学大学院博士課程――